

## 心理臨床における近代化と科学性についての試論

菱田 一仁（京都橘大学健康科学部）

### 1. Freud, S. の業績と近代

Freud, S. が精神分析学の基礎を築き、深層心理学に基づく心理療法がおこなわれるようになってから1世紀以上が経過している。Freud の理論を基礎としながら精神医学として発達した心理療法は、Rogers, C.R. によって非医師によるカウンセリングが行われるようになったことの影響を受け、心理学を基礎とした専門的な行為として、これまでに経験と知見が積み重ねられてきている。現代の心理臨床においても、Freud の業績が強く影響を与えているということは言うまでもないだろう。たとえ、依拠する理論としては直接的には関係がなくても、その理論の生まれてきた背景を考えると、Freud 理論からの進化として、あるいはそうした精神分析的な考えに対するアンチテーゼとして考えられてきた側面が考えられ、そこには明に暗に Freud 理論の影響が考えられる。

Freud 理論の特徴の一つは、意識的に把握することができていない領域である無意識的な領域を認めるということにあるだろう。一方で、現代においてはそうした無意識的な領域を想定する深層心理学は様々な問い直しながされている。つまり、近代化が進み、科学的で合理的な考えが一般的に広がっている現代社会において、科学的態度・合理的な考えによって説明することができるということが、心理療法においても求められていると考えられる。それは、国家資格である公認心理師という制度が整備される中で、より社会に対する説明責任を持った存在として考えておくことが求められることだと言えるだろう。そうした流れの中で、無意識を想定することなく主に学習の理論を基礎にした認知行動療法などの立場が広がりを見せているが、実際の臨床現場で目の前にするクライアントのことを考えるならば、その人の成長し

てきた家庭的な背景、周囲の人との関係やその中の感情体験はやはり心理的な態度や状態に影響を与えていると考えられるし、心を傷つくことから守ろうという働きである防衛機制など、必ずしも意識的に知ったりコントロールしたりできない領域を考えることもまた、一定の意義を持っているようにも思われる。

そこで、本稿においては、今後の心理臨床のあり方について考えるために、Freud の精神分析が歴史の中でどのような意味を持っていたのかについて、近代化という観点から考察していきたいと思う。現代が近代化の進んだ社会であることを考えるならば、近代化という視点から考察することによって精神分析が持っていた意味、そして現代の、またこれからの心理臨床についても考察を深めることができると考えられるためである。

### 2. 啓蒙と小宇宙

先に述べたように、本稿の目的は Freud の仕事に関して、近代化ということと関連させながら考察することにある。それは Freud の考えそのものが近代化の流れの中に生まれたものであり、その影響を強く受けていると考えられるためである。そうした Freud の精神分析と近代の関係について考えるために、主に西欧諸国から始まった近代化という動きがどのような特徴を持ったものだったのか、という点から考察していきたいと思う。

近代化について考える上で、初めに近代以前の社会からどのように変化したのかという変化についてみていくことが必要であろう。近代以前の西洋における世界観について、阿部(1987)は「まず、家を中心として開墾され、耕作された畑を含む空間があり、(中略)それを小宇宙(ミクロコスモス Mikrokosmos)ととらえることができるでしょう。



図1 13世紀の世界地図 空白がなく、アフリカなどにモンスターが描かれている(阿部, 1987)

その小宇宙の外側にはウトガルト(Utgard)と呼ばれる大宇宙(マクロコスモス Makrokosmos)が広がっており、そこには人間に敵対的な諸霊や巨人などが住んでいると考えられていました。この大宇宙という観念は後になると拡大されてゆき、そこにはあらゆる種類の病気や災害の根源があり、死者がすみ、人間の運命を司るすべての源泉がそこにあると考えられていった」と述べている。つまり、近代以前の西洋社会においては日常生活の中で人間によってコントロールすることのできる部分と、そうではない部分とが強く区別されていたと考えられる。それは、近代化を経た我々が日常的に目に触れる家や町などと、見たこともない外国の風景を均質な空間の延長としてとらえるのに対して、日常的で身近な「内部」の世界と、その外の「外部」に質的な差を見出していたと考えることができるだろう(図1)。

それが、近代化の中で、「小宇宙と大宇宙の関係についてキリスト教の教義に基づく新しい整理が知識人の間ではじまっていました」(阿部, 1987)と、キリスト教の教義によって変化がもたらされ、それが次第に人々の空間認識のあり方に変化をもたらしていったという。さらに近代化の流れの中で、阿部(1987)が、Marco Poloの『東方見聞録』などの持ち込んだ知識が盛り込まれることによってキリスト教的世界像が正面に出な



図2 16世紀の世界地図(阿部, 1987)

くなっていることを指摘して、「図63は一五八七年にアムステルダムでつくられた航海用の地図です。この地図はこのころ一世紀以上にわたって実際の航海に用いられたものです。現在の私たちが見ても、すぐにヨーロッパだとわかり、イングランドもはっきりと描かれています。そしてここには中世的な地図の特徴が全くないことに気がきます。地図の近代化は世界像と宇宙像の近代化でもあったのです」(図2)と述べているように、次第にキリスト教的世界観が中心的な役割を果たしていた世界から、科学的・合理的な世界観が中心的な役割を果たすようになっていったという。それは、「このような空間観念の拡大は小宇宙の範囲を一方で大きく拡大してゆき、未知の世界 Terra incognita はしだいに小さくなってゆくのです」(阿部, 1987)と、ヨーロッパ人にとって知られていて自由に移動することができる領域である小宇宙が、次第に拡大していったためである。つまり、古代的な日常的に経験されコントロール可能な領域とその外側という区別が、キリスト教の世界観によって次第に整理され、さらに近代化の流れの中で科学的、合理的な考えが広がり、人間によってコントロール可能な小宇宙としてとら

えられていた領域が次第に広がっていったと考えることができる。

そうした近代化の流れについて、八木・滝上(2017)は Bacon, F. の「新哲学」、Harvey, W. の血液循環の発見、Descartes, R. の心身二元論／人体機械論、Galilei, G. の動力学、Boyle, R. の「粒子論」、Newton, I. の「自然哲学の数学的原理」などを取り上げて、「これが『科学革命』とよばれる新しい自然学—近代科学の誕生であった。それは『ギリシャの世界秩序の崩壊と空間の幾何学化』または、『スコラ学的方法の排除とアリストテレス自然学の崩壊』によって特徴づけられる。天と地の異質感は失せて、人の住む地上の世界は無限の宇宙の中に放り出され、宇宙はその隅々まで同一の一般法則によって支配される、という新しい認識が登場した」という。つまり、近代科学によって、上に見たような人の住む小宇宙と、町の外であり人のコントロールを超えた大宇宙という区別がなくなり、すべてが均質な一般法則によって科学的に把握されると考えられるようになったと言えるだろう。

それは、近代化の過程の中で大きな役割を果たしたと考えられる Darwin, C.R. の業績の中にも見ることができる。Darwin(1871)は“未開”とされた地域に自ら赴き、その生物について研究することによって、「私たちは、人間とほかのすべての脊椎動物が、どのようにして同じ一般的モデルに従った構造をしているのか、なぜそれらがみな同じ胚発生の初期段階を経るのか、なぜそれらがある種の痕跡器官を共通に保持しているのかについて、今や理解できるようになった。それゆえ私たちは、これらがみな共通の祖先に由来するからであることを正直に認めねばならないだろう」と、それまではキリスト教的価値観の中で聖書に倣い、神によって創造されたと考えられてきた様々な生物の種について、人間と同様の構造を持ち、連続性のある生き物であることを明らかにした。こうした Darwin の業績にまさしく近代化の流れを見ることができよう。つまり、それまでは人間の世界であり理性の光が届く場所と、その外部であり未開の領域とは大きく区別されており、未開の領域というものは、先に見た外部にある世界だったと考えられるためである。Darwin の仕事の重要なポイントは、「この結論に対して

躊躇を感じるのは、われわれの父祖をして、人間は神に似たものから生まれたと言わしめた傲慢さと、われわれが自然に持っている偏見のせいに過ぎない」(Darwin, 1871)というように、彼がそれまで当たり前であった内部と外部の境界の外に足を踏み出したことにあり、さらにはコントロールできないと思われてきた外部の領域にも内部と同様の合理的な秩序が存在していることを明らかにしたこと、さらには、それまで外部から切り離されて理性的な社会をつくっていると考えられていた内部の社会が外部との連続性を持っており、むしろ外部にこそ人間の秩序を持った社会の原型があることを明らかにしたことにあると言える。

先に、近代以前の社会が身近でコントロールできる領域の内部を外部から分け、内部を合理的な秩序ある世界とし、外部をそうした秩序の光の及ばない外部と位置付けていたと考えられることを見た。Darwin(1871)が「私たちは、感覚、直観、愛情、記憶、注意、好奇心、模倣、推論などといった、人間が自慢にしている様々な感情や心的能力は、下等動物の中にも初歩的な状態で見られ、ときには非常によく発達している場合もあることを見てきた」と言うように、Darwin の持っていた合理的な思考法の基礎は西洋文明にあり、それを基準にしながら外部にも視野を広げていったと考えられる。つまり、Darwin の考えにおいては、外部の社会もまた内部と同じように、彼の持っていた合理性の光によって照らされることになったと言えるだろう。つまり、西洋文明とは異なる独自のあり方としてその外側を探索したというよりも、小宇宙としての西洋文明の持っていた価値観をその外側に対しても適応していった過程として考えるのが適切だと言える。そう考えるならば、Darwin の業績とは外部に積極的に出ることによって、外部を内部と同じ一つの説明原理によって説明することができることを示したことにありとされる。いうなれば、懐中電灯のように自らの持つ理性の光を手にかオスの支配していた外部の暗闇を照らしていき、内部を拡大していったことが Darwin の業績であり、それが近代化のあり方を象徴していると考えられる。

### 3. Freud 理論と「進んで無知を認める意志」

ここまでは、西欧社会において、近代以前の世界観から近代化の中で世界観が大きく変わっていったことを見てきた。そして、こうした Darwin の考えは精神分析という方法によって、それまで理性の光の当たっていなかった心の領域を探索した Freud にも影響を与えていると考えられる。Ritvo, L. B. (1990) は「人類学は『人類発生』(anthropogeny)、つまり動物の祖先からヒトの起源の研究にならねばならなかった。フロイトが神経症の問題にこの手がかりを応用したことが精神分析の土台になり、四つの主要なメタ心理学的見地の一つ、つまり発生的見地、あるいはダーウィンの見地になった。(中略)フロイトは青年時代にダーウィンに関心を持って以来、現在を理解するには過去が重要だという観念を吹き込まれた」と、Freud 理論における Darwin の影響を見ているが、Freud (1932) 自身が「精神と心は、人間外の諸事物とまったく同様、あくまで科学的研究の対象だからです」、「科学に対する精神分析の貢献は、他でもありません、研究を心の領域にまで拡大した点にあります」と述べていることを考えると、Darwin の影響は、精神分析の理論的な背景として生物学的な進化の理論を参考にしただけではなく、その科学的態度にも強く表れていると考えられる。つまり、文化的・宗教的にあらかじめ決まっていることから議論をスタートするのではなく、それまで宗教的な世界観の中では正しくとらえられてこなかった事柄についても正確に観察し、科学的な態度でそれに挑もうということである。もちろん、上山(2014)の言うように、必ずしも Freud が科学的な態度でのみ挑んだというのは言い過ぎなのかもしれない。しかし、Freud が(1932)「精神分析は科学の世界観を採用しなければならないということです」と述べているように、あくまで科学的な態度として心の領域に挑む姿勢を持っていた点は重要だと考えられるだろう。

Freud の精神分析は、八木・滝上(2017)が「患者の主観的な意識的・無意識的状态に対する客観的(科学的)な研究方法」と言うように、精神分析という「科学的」な方法によって、精神的な領域

についても意識的に把握、コントロールすることのできるはずの均質な領域であることを仮定したうえで分析することを目指したと考えられる。つまり、八木・滝上(2017)が精神分析の特徴について、病因になっているすべての無意識的なものを意識的なものに置き換えることによって解決しようという点を挙げているように、それまでの認識においてわかっていなかった“無”意識の領域について、「神経症の診療を通じて目を開かれた無意識の世界を掘り下げる作業に着手して、無意識の根本的特徴が『力動的(dynamic)』であり(いいかえれば一種の『動力または活力』として)我々の行動を決定する」(八木・滝上, 2017)と考え、明らかにしようとしたと言える。そして「また無意識を細別しようとして、いくつかの力(超自我・自我・エス)によって構成されている精神装置(psychic apparatus)を仮定した」(八木・滝上, 2017)とされているように、Freud の精神分析において特徴的なことは、意識的に知る／コントロールすることができていなかった、無意識の領域を想定し、その中で力動を把握し、それを分析の中でコントロールすることが出来るようにしようとしていた点だと考えられる。

ここまで見てきたように、Freud の精神分析は近代科学の精神のもとに発展してきたと考えられるが、近代科学がそれまでの考えと異なる点について、Harari, Y. N. (2014) は「進んで無知を認める意志」、「観察と数学の中心性」、「新しい力の獲得」の3つの特徴を挙げている。この点から考えるとき、Freud (1932) が「分析作業のなかにもいろいろな予断がどうしても入り込んできますが、それらは極力抑制しなければなりません。観察を通して、ここかしこで、ばらばらに新しい事実と出くわすこととなりますが、さしあたり、それら断片が整合的につながることはありません。推測が立てられ、仮説がつくれますが、それらは事実にあっていることが確認されなければ撤回されます」と表現する精神分析に対する態度は、無意識という領域を想定することによって「進んで無知を認める意志」を持っており、それまで治療が困難だったヒステリーの治療法を見出す「新しい力の獲得」を目指し、その際に患者自身の訴えを精緻に分析しようとした「観察と数学の中心性」を持っていることから、Freud (1932) 自身「普通



図3 16世紀サルヴィアーティの世界地図 左側に空白部分が見える (Harari, 2014)

の科学的作業との違いは、唯一、精神分析では実験による研究補助というものが望めないという点だけです」と認めるように数学的な基礎は弱いものの、まさに近代科学的な態度を持っていたと考えることができるだろう。

その中でも特に注目したいと考えるのが「進んで無知を認める意志」という点についてである。それは、無知を認めるという意志こそが Freud が「無意識」として提示した、人の精神活動の中にある、“知らない”領域を表していると考えられるためである。Harari (2014) は、「進んで無知を認める意志」について言及する上で、阿部 (1987) 同様に地図を比較する (図3)。つまり、近代以前の社会においては「明らかに、世界全体について本当に知る人は誰もいなかった。アメリカ大陸について知っているアフロ・ユーラシア文化もなければ、アフロ・ユーラシア大陸を知っているアメリカ文化もなかった。だが、よく知らない地域はただ省略したり、あるいは、空想の怪物や驚くべき事物で満たしたりされた。そうした地図に空白はなかった。だからそれらは、世界の隅々まで熟知しているという印象を与えた」という。先に見た阿部 (1987) の示す地図 (図1) もまた、当時の文化的な価値観によってすべてが統一的に描かれており、知らない部分については怪物を描いていた。それは、本当にすべて知っていたのではなく、キリスト教などの世界観によって、知っている部分としての小宇宙とその外部は神や怪物の支配する領域とすることによって説明していたと言えるだろう。それに対して、近代以降「十五世紀から十六世紀にかけて、ヨーロッパ人は空白の多い世界地図を描き始めた。ヨーロッパ人の植民地支配の意欲だけでなく、科学的なものの見方の発達を体現するものだ。空白のある地図は、心理とイデオロギーの上での躍進であり、ヨーロッパ

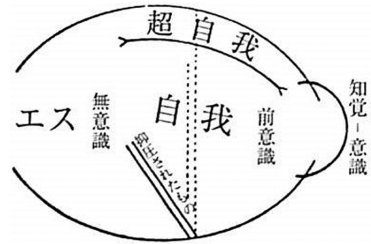


図4 Freudの局所論を説明するための図 (Freud, 1932)

人が世界の多くの部分について無知であることをはっきり認めるものだった」 (Harari, 2014) とされる (図3)。つまり近代科学とは、未だ知らない部分について、科学的態度によって必ず明らかにすることができるという前提があり、そのために積極的に“知らない”ことを認めることができると考えられるだろう。そして、心の無意識的な領域について分析するという方法を用いた Freud は、“知らない” (科学的方法によって明らかにすることができる) 領域として無意識を仮定し、未開の地に踏み出した Darwin と同様に、無意識的な領域に精神分析という方法を用いて踏み出したと言える。

そう考えるならば、Freud の態度は、Harari (2014) が近代化の特徴として挙げる、「進んで無知を認める意志」「観察と数学の中心性」「新しい力の獲得」の3つのうち、「進んで無知を認める意志」を強調するものだったと言っているのではないだろうか。つまり、人間の精神という、人間にとってあたかも当たり前で、すべて知っていてコントロールすることが可能であるかのように思われる心の働きにもまた、“知らない”領域があったということ積極的に認めるという態度を持っていたということである。それは、ちょうど上に地図の比較を見たように、それまで宗教的な価値観や世界観による説明によって、考えられてこなかった領域が、地図の空白として、つまり“知らない”領域として示されたと考えることができる。Freud (1932) 自身が地図のような絵 (図4) にしているように、Freud は視覚的に意識的な領域と無意識的な領域とに区分することから始めている。そして、Freud の特徴として考えられるのは、無意識の領域もまた、意識されてきた領域と同等の科学的で合理的な原理によって動いていると考えたところにあると考えられる。つまり、意識の

領域の中で働く合理的な理性の働きを、無意識の領域に適用したということである。

こうした Freud の態度は、19世紀の西洋社会の中で大きな議論の対象となっていたテレパシーなどのオカルト主義に対する態度に顕著である。Freud (1932) はオカルトなど、超自然的な現象とされてきたものに対して「私たちは、そうしたオカルト的なことがらを、これとは異なる科学のすべての素材を扱うのと同じように扱い、まずは、その種の出来事がじっさいに証明可能かどうかを突き止め、そしてその次に、それが事実であることに疑いの余地がなくなったときにはじめて、今度はこれを説明づける努力をするつもりであります」と述べる。つまり、オカルティズムそのものに対して盲信することが前近代的な“すでに知っている”という態度であるためにそれを退けるのみならず、初めからそれが“ない”とすることも退け、あくまでその時点では“知らない”、“わかっていない”こととして、「進んで無知を認める意志」という態度を貫こうというのである。Freud (1932) 自身が述べているように、他のあらゆる自然現象と同様に、科学的・合理的態度で挑もうとしていると読むことができるだろう。それは、「十年以上も前になりますが、これらの問題が初めて私の視界に入ってきたとき、私もまた、私たちの科学的世界観が脅かされるのではないかと不安を感じました。オカルティズムのいくぶんかでも真であることが立証されることにでもなりますと、科学的世界観は、心霊主義や神秘主義に席を譲らなければならないだろうからです。しかし今日では私は考えを改めております。思いますに、オカルト的な主張のうち、真であると判明したものがあれば、科学はそれを受け入れ、加工するだけの力量を持っているのでして、それが信じられないようでしたら、科学に大いなる信頼を抱いているなどとは、お世辞にも言えないでしょう」(Freud, 1932) という言葉にも表れているだろう。つまり、人間の理性が及び、コントロールすることが可能な領域の内部のみを認めてその外部を否定(抑圧)するのではなく、コントロール不可能なものとして否定(抑圧)されてきたものもまた科学的な分析の対象として捉えようとしていると考えることができるだろう。

ここで注意しなくてはならないのは、上山

(2014)が「結局フロイトはいかに古代人の『原始的遺産』を認めても、それは、彼の性欲リビドー、それに基づくエディプス・コンプレックスの普遍化、原父殺害、トーテム信仰の起源の証明のための道具でしかなかった。それは、フロイトが科学の還元主義に依拠するヘルムホルツ派の科学観から出発したからだ」と述べる Freud の態度である。つまり、Freud の態度は、未知のものとしての無意識的な領域を見出したが、それに対する態度は、Freud の精神分析によって説明可能であるはずの対象として考えていたという点である。つまり、Freud の態度は“知らない”領域としての無意識的な領域は認めようとしていたが、あくまでも、Darwin 同様、外部とされてきたものに対して西洋近代の考えを基に、彼が持っていた合理的な科学的理論を当てはめることによって理解しようとするものだったと考えられる。いうなれば、小宇宙の外を理解するにあたって、それまでは小宇宙を照らしていた科学性という理性の光によって探索を行ったと考えられる。そうした探索の中で、Freud は「新しい力の獲得」として、それまでは治療が困難であった神経症の治療法を模索した。つまり、それまで意識されていた世界の外部にあると考えられていた全てのものに光を当てていこうという思想が近代化の運動にはあり、その流れの延長線上に Freud の思想があると考えられる。そして、その現代の心理療法はそうしたフロイトの思想の影響を受けて発展してきていると言えるだろう。

#### 4. 心理臨床の近代性

ここまでは、近代化が人間によって理解、コントロールすることが可能である領域を広げていこうという態度があったこと、そしてそれが心理療法にも影響していると考えられた。そして、こうした近代化というプロジェクトは、現代、世界のいたるところにまで拡大していると言えるだろう。それは、心理学の領域もまた例外とは言えない。Weber, E., Fechner, G. による精神物理学に始まり、Wundt, W. M. による実験心理学、Pavlov, I. P. や Skinner, B. F. といった心理学者によってつくられた学習理論とそれを基にした認知行動療法の発展など、心理学の領域もまた近

代的な世界観を基礎とした、科学的な手法によって考えられることが多くなっていると考えられる。

先にも見たように、近代化は人間の科学的な観察や実験、合理的な思考によって外部を消失させ、内部を拡大することによってあらゆるものを均質な科学的な光によって照らしだし、コントロールしようという考えのもとに進められてきたと考えられる。心理臨床の分野において、近年強調されるエビデンス、つまり量的な研究を行い、対象となる症状に対して十分に効果的であると分かっている方法を使うという考えもまた、Harari(2014)の言う「進んで無知を認める意志」「観察と数学の中心性」「新しい力の獲得」を強調するという点において、近代的な考えの延長線上にあるものだと考えることができるだろう。

ところで、エビデンスを強調する際、特徴的であると考えられるのは、それが丹野(2001)が「客観的に実証された根拠に基づいて医療をおこなっていくとする医療現場での運動」と言うように、うつ症状や強迫症状といった症状ごとに統計的に有意な効果のある対処法を採用しようという考えだといえる点だろう。つまり、物理学や医学がそうであるように、とある方法論や理論によって一般に当てはまる「新しい力の獲得」を目指そうという態度だと考えられる。その際の「進んで無知を認める意志」が認めようという無知とは、特定の症状に対して治療的な関わりが与える影響や、よりよい方法論だと考えられる。そして、その際に効果を発揮しているのが「観察と数学の中心性」であり、ここで心理学が依拠する数学とは主に統計学である。つまり、統計的に考えることによって、人の心という未知のものに対して有効であると考えられる方法を明らかにしようというのである。

しかし、ここで重要だと考えられるのが統計学という方法の特徴である。やまだ(2013)が「研究者による外界からの操作を『独立変数』、それによって研究対象(被験者)から引き出されるアウトプットは『従属変数』と呼ばれた。従属変数としての『行動』や『反応』が、客観的なデータとして統計的に分析された」と言うように統計学は、あるサンプルから得られたデータについて、一定の操作に対する反応を分析することによって、母集団全体の特性や傾向を検討することが中心的な

役割となっていると考えられる。それによって、母集団となる“ヒト全体”、“うつ状態にある人”などの集団全体の傾向を見出すことは可能だろう。しかし、その方法として統計学を基にすることで、個人の特徴というものが見失われてしまうこともあるのではないだろうか。だからこそ、やまだ(2013)は「生態学的に意味のある研究、日常生活において必要とされる研究からかけ離れてしまったのではないだろうか」と、量的な研究だけではない、質的な研究の重要性を述べる。それは、100人の人が生きるということは、同じ試行を100回繰り返すことではなく、毎回すべて前提条件も周囲の環境も、本人の特性も異なった100種類の出来事だからだ。確かに、類似した身体を持った存在として、一定の共通性を見出すことは出来るだろう。しかし、「私」という個人の人生をすべてそれで説明しつくすことは不可能なのではないだろうか。その個人がいかに生きるのかを強調して考えようとする時、やまだ(2013)の言うように、心理学の研究法として個人に注目する考え方が質的研究として重要視されていると考えられる。上のHarari(2014)の言う「進んで無知を認める意志」という近代科学の特徴に合わせて考えるならば、量的な研究における「無知」とは、多くの人にとって共通する部分であり、質的な研究においては、他の誰とも異なり、生まれや家族、時代背景やその人の身体的な特徴など、一般化することが不可能なその人の人生、そして個々の人の内面こそを「無知」としてとらえていると考えられる。

確かに、多くの効果研究が示しているように、一定の症状に対してより多くの人にとって効果の認められる対処法について検討していくことは必要だろう。しかし、人の心、特にその悩みを扱う心理臨床について考えるならば、それだけでは不十分であるように思われる。実際、河合(1991)が「私の心理学」という言葉で述べているように、心理療法を訪れる人の悩みは、その人個人の悩みであり、人の心一般の傾向の問題ではないことが多いためである。確かに、一定の傾向に対して、とある考えを適応することが有効であるという一般的な傾向について知ることは、人の心に向かい合う専門家として必要な知識であると考えられる。しかし、実際に目の前にするクライアントは、一人ひとり異なり、その問題が起こってきている背

景もまた一人ひとり異なっている。さらに、同一の人物であっても、様々な経験を経ることによって、成長し、変化していると考えることが適切だろう。そう考えるならば、心理療法について考えるうえでは、上に見たような“知らない”領域は、常にクライアントによって異なっていると考えられる。つまり、近代科学的な態度として、「進んで無知を認める意志」を重要視するならば、すべての人にとって一般的に通用する態度のみならず、個々のクライアントそれぞれの内面に対して「進んで無知を認める意志」をもって臨む態度こそ重要になるのではないだろうか。

## 5. 無意識と心理療法のこれから

ここまでは現代の心理療法が、近代化、つまりあらゆるものに合理的で科学的な光を当てるといふ考えの中で、心にも同様の光を当てるといふ考えを進めてきたことを見てきた。

ここで、上に見たように、Freud 理論の一つの特徴である無意識ということについて改めて考えてみたいと思う。上にも見たように、現代、科学の力が進展したことによって、内部はどこまでも拡大され、科学の光を当てることができない領域というものはないかのように見える。つまり、合理的な精神によって知る、コントロールすることができない領域はないかのようなのである。人の精神活動もまた近年の神経科学の描き出すように、神経活動やホルモンによる情報伝達の集合であり、投薬などによってある程度コントロールすることが可能だからだ。精神的な働きのすべてが神経伝達物質の影響や学習理論によって説明可能となると考えるとき、そこには「無知」なものも存在しなくなると言えるだろう。しかし、実際に心の働きを考えると、すべてをそうした理論によって説明することができるのか、という点については疑問が残る。むしろ、そう考えてしまうということ自体が、すべて既知のものとして考えるという態度につながってしまうのではないだろうか。

先にも述べたように、無意識という概念は、近代化の流れの中で“知らない”領域として操作的に定義された概念だと考えるのが適切だろう。そして、上にも見たように、心のありようについては、少なくとも現時点においてもまた、すべて明

らかにすることができているとは言い難いのではないだろうか。特に、脳や神経に関する知見が集まり、ヒト全体の傾向としてどのような精神活動が行われているのかについてある程度検討することができるようになったとしても、個々人の心の動きや悩みについて、そのすべてを明らかにすることは困難だと考えられる。つまり、「無知」な領域としての無意識的な部分は今後も残り続けると考えるのが適切だと言えるだろう。物理学における対象は、全世界どこにいても変わらないかもしれない。しかし、心理学において対象となる心や精神活動というものは、文化の影響のみならず、時代精神や科学技術の影響、また、その個人の経験、周囲の環境などによって大きな影響を受けていると考えられるからである。そう考えるならば、対象そのものが文化や時代、そして個人によって異なっていると言えるだろう。確かに、その中で一般的な傾向や、多くの人の当てはまる部分はあると思われるが、各個人の生きる人生について考える限り、すべての人に当てはまる単一の理論があるとは考えにくい。心や精神のあり方は文化的、社会的にも異なり、何よりも個人によって大きく異なっていると考えられる。

むしろ、すべての人に当てはまる理論がないからこそ、個人面接を中心とした心理療法に意味があるのではないだろうか。あらゆる理論を参照しながら、その個人にとっての生きる意味、日常生活の中では気が付かずして過ごしてしまっていることについて個々に検討することによってこそ、個人療法としての心理療法が治療的な意味を持つと考えられる。クライアントの訴えによっては学習の理論によって説明が可能、あるいは変化をもたらすことが可能なこともあるだろう。あるいは精神分析の言うように抑圧された感情体験が大きな意味を持っていると考えられる場合もあるかもしれない。あるいは、Rogers(1959)などの言うように、面接の場面で感じられる身体感覚的な体験過程が重要な変化をもたらす場合もあるだろう。しかし、その一つで、あるいはそのすべてであっても必ずしも人の心は十分に理解できないと考えることが適切なのではないだろうか。それこそが、「進んで無知を認める意志」を持った態度だと考えられる。そこで無意識的な内容を、“過去の感情体験の中で抑圧されたもの”あるいは“エディ



プス・コンプレックス”などに限定してしまうことは、むしろかつての宗教的な世界観において、“知っているもの”として世界をとらえようとしたことと共通してしまうと考えられる。それは、同時に精神的な働きをすべて学習理論に帰結させることも同様である。

そう考えるならば、Freud の精神分析において画期的であり、現代にいたるまで重要な意義を持つと考えられるのは、日常的に知っている、コントロールできる領域としての意識の領域の外部に、「私」にとって気づいていない、知らない、意識することができない、コントロールすることができない領域があるということ積極的に認めようとしたという事実だと言えるだろう。臨床場面においてつとに経験するように、「私」の行動や人生、思考は必ずしも「私」によって意識的にコントロールできるものではない。家族との関係について、自分の感情について、行動について、自分にはどうしようもできなくなったとき、クライアントとして心理療法の場に訪れるのではないだろうか。その時に認識しておくことが重要だと考えられるのは、やはり今の時代になっても「私」の中には、意識的にコントロールすることのできない何かがあるという事実だと言えるだろう。つまり、常に“知らない”ものがあるということを受けようという態度が大切なのだと考えられる。

無意識的な領域で動いている規則や力動の一つに、Freud や後の精神分析家が明らかにしたような性欲や抑圧された欲望などがあるかもしれない。あるいは経験の中で形作られた自動思考を想定することもできるかもしれない。しかし、それらのすべてを抑圧された願望や、過去の経験からの誤った学習といった一つの理論によって説明ができると考えることは、“知らない”はずの領域をあたかも“知っている”かのように捉えてしまうことにつながると考えられないだろうか。むしろ、心理臨床においては Freud 自身がそういった立場に努めたように、あるいは Harari (2014) が「無知を認める意志」を科学的な視点として重要だと言うように、様々な研究が重ねられる中で一定の見通しなどはつけることができるようになってきたとしても、人の心のすべてを理解することはできておらず、「私」の中に「無知」の部分があるということを受け入れること、そしてその中で何

が起こっているのかについて、すでに分かっていること、あるいはこれまでに作られてきた仮説を基礎にしながら、“知っている”のではなく、“知らない”ものとして真摯に検討し続けることが重要なのではないだろうか。

立木(2016)は、精神分析の特徴と今後について、「フロイトはヒステリーの臨床に取り組むなかで、彼の精神分析を創造した。だが、分析家が出会う患者とともに、精神分析のフロンティアはつねに動いてゆく。フロイトに続く分析家たちは、それゆえ、一方ではフロイトの精神分析を受け継ぎながら、他方では自らがかわる患者の病態は内的構造に合わせて、そのつと精神分析を手直しし、創造しなおしてきたのである」と述べる。ここまで見てきたように、精神分析は人の心動きについて、近代人であり科学者たろうとした Freud の「進んで無知を認める意志」によって生まれ、「新しい力の獲得」を目指して、その方法は作り出されたと考えられる。立木(2016)は「ひとりの患者とひとりの分析家が行う共同作業の中で、つねに生まれ変わりつつ推し進められる実践、その意味でつねにそれ自体が『新規時き直し』を求められる実践。そうした実践であり続けられるかどうか、精神分析の未来はかかっている」と述べているが、一人一人の人生が異なっているように、一人一人の心の動きについても、ある程度共通するものは見られるものの、すべての人間の心の動きを統一的に説明しようとする理論はおそらくないと言っていいだろう。立木(2016)は精神分析家の立場から、精神分析家の態度としての「彼の精神分析」と Freud 理論を説明したが、それは「共同作業」を行うクライアントにとっても共通しているだろう。河合(1991)が「私の心理学」という言葉で表現するように、クライアントにとって意識されていない、意識することのできない無意識的な考えがクライアントによって異なるのならば、そのクライアントの数だけ、そして事例の数だけ深層心理学の理論・考え方はあると言えるのではないだろうか。心を傷付きから守るための防衛機制などの一定の法則があったとしても、何が深く傷つく体験となるのか、どのように心を防衛するのか、それがセラピストとの出会いの中でどのように展開するかは人それぞれだからだ。

確かに、一般に科学とは一定の自然現象に対し

て常に成り立つ法則を見出すことを目指すものであると言えるだろう。しかし、それはその対象や環境が再現可能であることを前提として考えると考えられる。心理臨床の場面に訪れるクライアントの訴えには、ある程度の共通性を見出すことも可能かもしれないが、それは必ずしも他の人の訴えの再現でもなければ、万人に共通する“一般的な悩み”ではない。むしろ多くの人にとって役に立つようなアドバイスでは解決しないときに心理臨床の場を訪れることが多いのではないだろうか。そう考えるならば、“知っている”世界である小宇宙の中に留まり、その中で成立する法則を当てはめることによってあらゆることを理解しようとするのではなく、これまでに明らかとなった知見を携えながらも、常に「無知」な大宇宙を目の前にした、“知らない”ものに向かい合う存在として目の前のクライアントの訴えに対して開かれていることこそが心理臨床における科学的な態度といえるのではないだろうか。

本稿においては、主に西洋社会において発展した近代化という運動を参照しながら心理療法のあり方について考察を進めてきた。しかし、日本の文化を考えると、近代化という流れ自体、外から入ってきたものであり、また文化的にここで見た内部や外部についての考え方、捉え方も異なっていると言えるだろう。そのため、日本文化の中での心理臨床の今後については、日本の文化における「無知」や、「外部」に対する態度などを踏まえたうえでさらなる検討を行うことが必要となると考えられる。

## 文 献

- 阿部謹也(1987). 甦える中世ヨーロッパ 日本エディタースクール出版部.
- Darwin, C. (1871). *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*, London: John Murray. 長谷川眞理子(訳)(2016). 人間の由来 上 講談社学術文庫.
- Freud, S. (1932). *Neue Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*, London: Imago publishing Co., Ltd. 道旗泰三(訳)(2011). 続・精神分析抗議入門 フロイト全集21 岩波書店.
- Harari, Y. N. (2014). *Sapiens: A Brief History of Humankind*, London: Harvill Secker. 柴田裕之(訳)(2016). サピエンス全史: 文明の構造と人類の幸福 河出書房新社.
- 河合隼雄(1991). イメージの心理学 青土社.

- Ritvo, L. B. (1990). *Darwin's Influence on Freud: A Tale of Two Sciences*, New Haven and London: Yale University Press. 安田一郎(訳)(1999). ダーウィンを読むフロイト 二つの科学の物語 青土社.
- Rogers, C. R. (1959). The essence of psychotherapy: A client-centered view, *Annals of Psychotherapy*, 1, 51-57 伊東博(訳)(1967). サイコセラピーの本質: クライアント中心の観点 ロージャズ全集15 クライアント中心療法の最近の発展 岩崎学術出版社.
- 丹野義彦(2001). エビデンス臨床心理学—認知行動理論の最前線 日本評論社.
- 立木康介(2016). 精神分析の実践と思想 石原孝二・信原幸弘・糸川昌成(編) シリーズ精神医学の哲学 I 精神医学の科学と哲学 東京大学出版会.
- 上山安敏(2014). フロイトとユング 精神分析運動とヨーロッパ知識社会 岩波現代文庫.
- 八木剛平・滝上紘之(2017). 医学思想史—精神科の視点から 金原出版.
- やまだようこ(2013). 質的心理学とは何か やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也(編著) 質的心理学ハンドブック 新曜社.